

# フィリピンの古都ビガン観光開発

野 沢 勝 美

東南アジアにあって美しい観光資源に恵まれたフィリピンはこれまで観光振興をしてきた。しかしフィリピンを訪れる外国人観光客数は、他の東南アジア諸国に比較し多いとはいえない。二〇〇三年時点で年間一九〇万人と、マレーシア一〇五七万人、タイ一〇〇八万人の約五分の一に過ぎない。内外観光客の飛躍的増大が急がれている。本稿はフィリピンにおける観光開発の新潮流である文化遺産と観光を考える。

二〇一〇年外国人観光客五〇〇万人に

アロヨ政権は観光開発の重要性を認識し「中期開発計画(二〇〇四-二〇一〇年)」の観光部門において目的地別の戦略を立て、このため八地区を指定した。この八地区は三グループにまとめられた。「主要目的地」としては、セブ、ボホール、マニラといった定番観光地のインフラ改善である。次に「特別重要目的地」としては外国人誘致のボラカイ、バギオ、バナウエに対するアクセス改善がある。最後は「副次目的地」で旅行者の増強を狙ったピガン・ラオアグ地区が登場する。これを受け観光省が作成の「中期観光開発計画(二〇〇四-二〇一〇年)」では、計画最終年に外国人観光客数五〇〇万人、観光収入額四八・六億ドル、同

雇用数六一〇万人を掲げている。政府による観光促進に向けた意気込みがうかがえる。

外国人観光客の目的地をみると、二〇〇五年に第一位の旅行先はリゾート地で有名なセブのある中部ビサヤ地方で全外国人観光客数の三二・一%を占める。第二位はスキューバダイビングで知られたパラワン島を含む南部タガログ地方で二一・二%、第三位は欧米からの旅行者に人気の高いボラカイのある西部ビサヤ地方の一五・四%である。この三地方だけで六八・六%に達する。そして、外国人観光客がセブ、パラワン、ボラカイの海浜リゾートに集中していることがわかる。また、全地方の国別外国人人数では、アメリカが二一・二%、韓国一九・六%、日本一六・六%で、この三国で五七・四%に達する。

## 台湾人に人気のイロコス地方観光

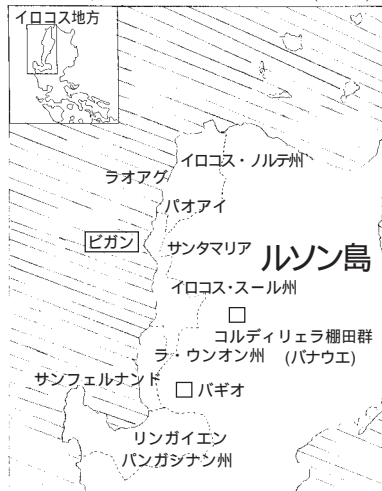
本稿はルソン島北部のビガン市を中心とするイロコス地方の観光開発に焦点を置くものである。ここに焦点を絞ったのは、第一に、筆者は同地で農村調査を継続してきたが、農業に加え観光開発を地域開発の起動力とする必要性を痛感したこと、第二に、同地方には教会など歴史的建築物、記念碑が保存されており、観光開発

を契機とし、観光資源に対する評価は民族的自尊心の高揚に直結すると解されるからである。ルソン島北端に位置するイロコス地方は四州からなり、この地方への外国人観光客数は四・四万人と全国第七位で、この数は近年持続的に増大している。このうち台湾人は一・八万人と台湾人の地方別訪問先では最大となる。イロコス地方は台湾人の絶大な人気観光地なのである。これに中国人〇・六万人が続いている。

イロコス地方の外国人観光客数では、四州のうちイロコス・ノルテ州が最多であるが、これは北部ルソンで唯一の国際空港のある州都ラオアグ市を経由して他州に向かうからである。国際便はいずれも直行便で、現在ラオアグと台湾の高雄とは一社で週三便、香港とは二社で週六便、広州とは一社で週二便が運航している。また、国内便は二社が計六便を運航している。

北部ルソンの辺境にかくも国際便が多いのは、第一に、ルソン島北部に位置するイロコス地方は労働力移動など台湾南部、広州、香港と

(図) イロコス地方配置図 (筆者作成)





古都ピガンの中心 クリソロゴ通り

(筆者撮影)

の人的往来が増大し、これが恒常的な台湾などからの観光客数維持に結びついたと考えられる。そしてこれを可能とする背景として、地元産業への投資の流入があった。近年ラオアグ、ピガンにはホテルの新増築が盛んである。

### 世界遺産登録で古都ピガンに脚光

現在ユネスコ世界遺産としてフィリピンからは五件が登録されている。自然遺産は国立公園など二件がある。文化遺産は三件で一九九三年登録のパロック様式教会群、九五年登録の「世界の八不思議」として有名なコルデリエラ棚田群、および九九年登録の古都ピガンがある。そして、このパロック様式教会群には、イロコス・ノルテ州バオアイのサンアウガステイノ教会、イロコス・スール州サンタマリアのアスン

ション教会が含まれている。まさにイロコス地方は文化遺産が集積しており、その中心に古都ピガンが君臨しているのである(地図参照)。

イロコス・スール州の州都であるピガンには二つの歴史的特徴がある。第一に古都ピガンでは唯一フィリピンにおいて三〇〇年にわたり歴史的景観が保存されたとの点である。ピガンは一六世紀後半にスペイン植民地統治下で建造された都市として、ルソン島北部における交易の機能を備えたものであった。ところが一九世紀半ばにフィリピン産砂糖が国際商品となることで、同様に植民地支配下にあったマニラ、セブ、レガスピ、イロイロなどが開港され、その後今日にみられるように拡大を遂げてきた。一方、貿易港としての優位性を失ったピガンは取り残された。このため町並みが当時のまま保存されることとなったのである(写真)。

第二に、民族主義的歴史認識の形成である。スペインは植民地支配に「聖書と剣」を用いたが、時代思潮の変遷のなかで地元イロカノ(イロコス人)による反乱を引き起こすことになった。西洋文明の東洋的受容において内在する矛盾が増幅され、これが一九世紀末に頂点に達した。民族差別的な宗教政策に抗議し、スペイン政府に処刑された三神父のうちの一人ブルゴス神父はピガンが輩出した国民的英雄である。

### ピガン観光資源と地域開発

今日のピガンは町中が活況を呈している。この背景には、前述のとおりユネスコに登録した世界遺産の保存、修復がある。これら教会施設

および歴史的建造物の修復は中央政府、地方政府の公的資金によるものでなく、スペイン政府による技術指導に加えて、地元経済界、宗教団体による資金援助があった。町並み保存が観光資源となったのである。そしてピガンの活況には陰の要因もある。すなわち一九八〇年代まで続いた地元政界の政争終息である。同州のシンソン知事派とクリソロゴ派との武力闘争は凄惨を極めたもので、観光促進の余裕はなかった。政治の安定で観光投資が始動したのである。

これに加えて、二〇〇一年のピガンの市昇格による内国歳入割当(地方交付金)の増額があった。また、ピガン市経済の活性化を反映して市税収入、事業収入は増大し、市財政を好転させている。かくして二〇〇五年度収支書によると収入が一億六八七二万ペソ、支出が一億二二二万ペソであり、この収支差から市補助金、寄付金を差し引くと純収入は三五三〇万ペソの黒字である。これを資本金に繰り入れると同年度期末の貸借対照表における市資本金は二億五八三九万ペソにも達する。財政状況の余裕は、今後は世界遺産保存に向けた市事業を活発にし、これがさらに内外の観光客を誘致するという好循環に入ったといえる。

筆者とのインタビュでピガン市のメジナ市長は、戦略的歴史都市開発の必要性を指摘していた。このため旅行者数、宿泊数などの基礎データ収集、その分析方法など観光促進に直結する技術指導が喫緊の課題となっている。

(のざわかすみ・国際関係学部教授)